

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ) -

目	次
○新しい薬を作る研究..... 1	○第34回国立大学図書館東北地区協議会総会...19
○ロボット研究こぼれ話..... 3	○特別企画展「夏目漱石 - 漱石文庫に見る文豪 の生涯 - 」を開催.....20
○プランクトン - その語源を調べる - 8	○会 議.....21
○本館所蔵秋田家史料の目録作成とデータベース化.....11	○附属図書館商議会商議員名簿.....22
○平成14年度参考図書購入報告.....17	○人事異動.....23
○平成14年度特別図書購入報告.....18	○編集後記.....24

新しい薬を作る研究

北青葉山分館長 井 原 正 隆



私の専門は新しい薬を開発する際に最も基本となる有機合成化学です。医薬品の殆どは炭素、水素、酸素と窒素原子から成る有機化合物ですから、私たちの研究は、新規な医薬品を開発する(創薬)の基礎であり、新しい有機化合物を作ること(合成化学)から創薬研究はスタートすると言って

も過言ではないと思います。私自身はこれらの原子同士をくっつけたり、離したりする有機反応の面白さにすっかり虜になってしまい、人間社会が必要としている薬を見いだすことには殆ど興味がなかったのが現実です。今までは専ら有機化学的な興味から様々な有機化合物を合成してきたわけですが、物作りは創薬の始めですから、いつのまにか人に役に立つものへと発展しつつあります。まだ萌芽的な段階ですが、二つの研究が実を結べば素晴らしいことになるかと期待しています。

その一つは抗マラリア薬の開発研究で、多くの方々はなぜ今ごろマラリアなのかと疑問に感じるかと思います。しかしながら、既存の薬剤に耐性を持つマラリア原虫の出現もあって、毎年100万人以上が世界中で亡くなっている重大な感染症の一つです。私たちの合成した化合物は薬剤耐性マラリアに有効な医薬品となるばかりでなく、マラリア原虫を殺傷してこれを鮮やかに染色することから、診断薬に使えると期待して実用化に向けてベンチャー企業との接触を図っています。

もう一つは他大学の薬理研究グループとある製薬企業との共同研究を行っているウシの胎子の血清中に見つかった神経保護作用物質に関するものです。この化合物は私たちが単なる化学的な興味から合成していたものと基本的に同じ構造を持っているために、私たちの合成技術が役立つ可能性が出てきたものです。これはアルツハイマー、パーキンソン病、脳卒中などによる脳性機能障害の治療薬の開発に繋がると期待しています。生き活きとした質の高い一生を送ることは人間にとっては理想であり、高齢化社会においてはこのようなQOL(Quality of Life)を向上する医薬の開発が切に求められています。私たちはこれに応える薬の一つにしたいと考えて研究を進めています。

以上のように幸運にも恵まれて応用面がある程度開けてきそうですが、私の現在の重要な仕事はやはり新しい有機化学の反応の開発とその合成化学への利用で、研究がまとまれば化学系のジャーナルに投稿します。良い研究が完成すればインパクト・ファクターの高い国際誌に発表したいと考えるのは、研究者として当然であると思いますが、問題はその投稿形態の変化です。二十年ほど前まではタイプで原稿を作り、化学構造式は定規で書くことが行われており、論文作成は秘書の重要

な役割でした。その後パソコンで論文が作成されるようになり、非常な省力化が進み、秘書の助けを借りずに、自分で論文は作ることが常識になったと思います。

さらに、数年前からパソコンで作った原稿を電子投稿することが試みられてきましたが、この一、二年で電子投稿することがすっかり定着してきました。私の研究室ではこのことを行うのが教授の重要な役割となってきました。すなわち研究室の若い共同研究者が作成した論文を校正して、学会などの出版元にインターネットを使って送るという作業です。問題は電子投稿のやり方が学会や出版社によって異なり、まだ統一されていないことです。現在試行錯誤の状態でいろいろな問題がやる度に起きています。共同研究者の活躍のおかげで、ずいぶん電子投稿を経験しましたが、この時にはいまだに緊張し、終わるとどっと疲れが出てきます。数年のうちに手法の改良と、こちら側の慣れでもう少し楽になることを期待していますが、現在最も苦労している仕事の一つが電子投稿です。

ところで、東北大学の図書館では電子ジャーナルの購読が重要な課題となっており、共同購読ジャーナルの選択がワーキング・グループによって現在慎重に進められています。電子投稿の方法がまだ固まっていない状態ですから、出版社の電子ジャーナルの供給、販売の仕方もまだしっかりと決まっていないのが現状ではないかと危惧するのは私ばかりではないと思います。大変な時期に分館長になったと身の不運を嘆いていますが、そうとばかりは言っていられないのが現在の私です。

(いはら・まさたか)

ロボット研究こぼれ話

- 早すぎた研究，三半規管の機能 -

工学分館長 江 村 超



1. はじめに

奥脇昭嗣前工学分館長の後をうけて、2003年の4月より工学分館の運営に当たることになりました。所属は大学院工学研究科バイオロボティクス専攻の知能メカトロニクス分野です。

研究者の世界では、長期に亘って一つの分野で研究を行う研究者が多いのですが、私の場合は、自分の意志とは無関係に専門が幾度か変わり、必然的に幅広い分野の研究を行うこととなりました。例えば、博士課程を修了する1969年3月までは、流体力学や熱力学の分野の研究を行っていました。また、1969年4月に、横浜国立大学に講師として任用された時は、ピストン径が1m程度もある大型船用エンジンを相手に轟音の中で熱伝達を測定する実験に明け暮れていました。

1971年4月に、母校である東北大学に移り、人間のように2本足で移動するロボット（以下、2脚ロボットという）の開発に着手しました。2脚ロボットの開発には、デジタル計算機の知識が必要不可欠です。そのため、30才を過ぎてから計算機の勉強をし、当時マイクロコンピュータと呼ばれていた小型計算機を手作りで作り上げ、この手作りの小型コンピュータで機械を操る研究を始めました。マイクロコンピュータで機械を操る技術は、後になって「メカトロニクス」という名前で呼ばれるようになりましたが、日本で生まれたメカトロニクスという言葉が全世界に広が

り、現在では、とくにヨーロッパの工学系学部を持つ主要大学には、メカトロニクス（Mechatronics，形容詞は Mechatronic）という名を付けた学科や研究機関が数多く見られるようになっていきます。

1989年に、アメリカのオハイオ州立大学の6脚ロボット開発チームに参加する機会を得ました。半年間の短い期間でしたが、研究の合間に、他の大学や研究機関を訪問し研究を行っている様子をビデオカメラで撮影しました。最も印象深かったのは、カーネギメロン大学（以下、CMU と略す）で行われていた自動操縦自動車の開発研究です。この自動操縦自動車は、人間の目の役割をする CCD カメラから得られた画像情報を計算機で解析し、障害物を避けながら自動操縦で走行するものです。同様な研究を行いたく、帰国後直ちに自動操縦自動車の試作を行いました。ただし、CMU のような潤沢な試作費用はありませんので、全て学生さんとの共同作業による手作りで、CMU の約300分の1という驚く程の僅かな費用で何とか実験に使用可能なものが出来上がりました。

試作費の話が出ましたので、当研究室の研究費について触れますと、日本では2脚ロボットや自動操縦自動車のような先駆的な研究にはスポンサーがほとんど付かないため、研究費の大部分は、メカトロニクス技術を応用した NC（Numerical Control，数値制御）工作機械の開発で賄われています。私の開発した高速高精度 NC 位置決め技術を歯車加工機に応用し売り上げが急増した企業もありますが、2脚ロボットや自動操縦自動車の開発

の方が難問山積で私の研究者としての血が騒ぐため、NC 工作機械関係の開発研究は、研究費を得るために行うということで割り切っています。

以上のように、気が付いた時には、いつの間にか、複数の専門分野にまたがる研究を続けていました。そのため、一見ただけでは無関係に見える各専門の常識的な知識がお互いに利用し合えることが分かりました。今回は、この複数の分野で仕事をして来たために研究遂行上助けられた事例の一つを取り上げ紹介します。

2．静歩行ロボットから動歩行ロボットへ

私が2脚ロボットの開発に着手した1971年当時は、ロボットの姿勢が検出されていなかったため、姿勢の修正が不可能で、一度傾くと転倒してしまうのが普通でした。中には、転倒を恐れ、重心が低くなるように、脚の下部にモータ等の重い部品を組み込み、脚の上部からロボットの頭部にかけてブリキ細工のように中身が空になるようにし、外見だけは2脚ロボットに見えるようにしたものもありました。ところが、重心を下げると脚の慣性が増加するため、極端に動きの遅い2脚ロボットとなってしまいます。

私は、このような超スローな動きは、自分の性格に合わないため、2脚ロボットの歩行速度を上げる研究を始めました。歩行速度を上げるには、ロボットの重心を高くするとともに、上体の姿勢を検出し、傾くと瞬時に姿勢を修正し、転倒するのを防ぐ必要があります。この姿勢の修正動作を行わせようとして最初に困ったことは、姿勢制御に必要な特性を満たす市販の姿勢センサは、大きくて重く、2脚ロボットへの組み込みには適さないことです。

そこで、ロボットの傾き角（以下、姿勢角

という)を検出するセンサや傾く速度(以下、姿勢角速度という)を検出するセンサの小型化の研究を行い、脚ロボットに組み込み可能な小型の姿勢センサを独自に開発しました。また、開発した姿勢角センサや姿勢角速度センサを用いてロボットが倒れそうになると、直ちに姿勢の修正動作を行い、安定な歩行を行う2脚ロボットを開発するのに成功しました。1972年11月のことです。開発したロボットの歩行速度は、大幅に向上し、ほぼ人間の歩行速度に近いものとなりました。

私の開発した重心の高い2脚ロボットは、絶えず動的にバランスをとっていないと倒れてしまうため、動歩行2脚ロボットと名付けました。また、先の重心の低い2脚ロボットをこの動歩行2脚ロボットと区別するため、静歩行2脚ロボットと名付けました。

私の行った動歩行2脚ロボットの開発研究は、時期的に余りに早すぎて回りから評価してもらえず、辛酸をなめました。動歩行2脚ロボットの世界における開発は1980年代になってからであり、最近、マスコミ等で頻繁に紹介されている日本の企業が開発した動歩行2脚ロボットは1980年代の後半になって開発が始められたことなどを考えると、十年程度早かったこととなります。

3．三半規管の研究が必要になった理由

三半規管は、ご存知のように、動物の姿勢を検出するセンサの一つです。2脚ロボットの動歩行化には姿勢センサが不可欠のため、三半規管の構造を調べ、得られた知見を2脚ロボットの姿勢センサの開発に役立てようと思いました。1972年12月頃のことです。

三半規管は半規管とよばれる姿勢センサを3個一組にした呼び名で、各半規管が直交した三軸の各軸の回転運動を検出しています。先に述べた姿勢角センサや姿勢角速度センサ

は、半規管の構造を知る前に試作したものであり、姿勢角センサの場合は文字通り姿勢角が検出できるため、ロボットの姿勢制御が容易です。しかし、姿勢角速度センサの場合は、センサから得られた信号を時間積分し、角度信号に変換してからロボットの姿勢を制御する必要があります。この時間積分を行う過程で演算誤差を生じ、必然的にロボットの姿勢修正量に誤差が生じ、ロボットが倒れやすくなります。そのため、時間積分時に生じる演算誤差が可能な限り小さくなるように工夫する必要があります。

これらのことから、半規管が動物の回転運動をどのような物理量で検出しているのかを知りたくなりました。生理学や医学関係の書籍を調べると、私が調べた1970年前後に世界で発刊された十数冊以上の書籍の全てにおいて、半規管は動物の姿勢を角加速度の物理量で検出していると書かれています。

姿勢を角度の物理量で検出すると、例えば動物が1回転以上の多回転の回転運動をすると、姿勢角センサの最大検出角（普通は、 $\pm 100^\circ$ 程度）を超えるので、正常な姿勢制御が不可能になります。また、角加速度の物理量で検出すると、一度時間積分した後に再度時間積分を行わないと姿勢角が求まらないため、演算誤差の生じやすい時間積分を二度繰り返す必要があり、大きな演算誤差が生じて、姿勢制御に必要な精度の姿勢角を得ることは不可能に近くなります。これらのことから、半規管は姿勢角速度を検出していると睨んでいたのですが、この予想が大きく外れてしまいました。

生理学や医学の書籍に、半規管は角加速度のセンサであると書かれていたため、一時は演算誤差の生じ難い時間積分器や時間積分時に演算誤差の入り難い姿勢角度センサの開発を試みましたが、ことごとく失敗してしまい

ました。

このように、姿勢を角加速度の物理量で検出すると、姿勢の制御が難しくなるため、半規管は角加速度を検出しているとの定説に疑問を抱き始めました。

4. 半規管に関する論文の調査

姿勢を角加速度の物理量で検出しているとの定説に疑問を抱いたため、半規管関係の研究論文を調査し、何故そのような定説が出来上がったかを調べることにしました。そのため、時間の許す限り本学附属図書館医学分館にお邪魔し、半規管関係の研究論文を集めました。当時は、コピー料金が現在の十倍程度もし、しかもコピーをとるには毎回教授の許可が必要だったため、本当に重要な論文のみコピー機で複写し、その他の論文は、手書きで写しました。

調査に必要な論文が掲載されている雑誌の中には、分館ではなく研究室に置かれているものもあり、直ぐには閲覧出来ないため、無理を言って研究室から借りていただくことも多く、また、職務の合間にしか分館に行けないため、調査には、約半年以上かかりました。この間、医学分館の職員の方々には、私の無理な注文に嫌がらないで親切に対応していただきましたが、この時受けた親切を約30年も経た今も記憶しています。

初めに、生理学や医学関係の参考書の巻末に書かれている参考文献の中で、重要と思える論文をコピーし、半規管に関する解析や実験がどのように行われて来たかを調べました。入手した論文を読み進むと、その論文に引用されている元の論文が必要となり、コピーの必要な論文の数がネズミ算的に増えました。また、入手できた医学関係の論文はドイツ語で書かれていることが多く、辞書を片手に読むため、内容を理解するのに多大な時

間を要しました。

5. 半規管は本当に角加速度のセンサか？

このようにして入手した論文を読み進むと、次のことが分かりました。

- 1) 半規管 (semicircular canal) は、管 (canal) を半規状 (semicircular, 規には円の意味があり、半円状のこと) に曲げた外観をしているため、このように呼ばれるようになった。
- 2) 1930年頃から1940年頃にかけて、半規管の作動原理を明らかにする研究が盛んに行われており、半規管に関するこの時代の研究論文が多い。また、1940年以後は、半規管の作動原理を追求する論文は余り見られない。
- 3) 半規管を角加速度のセンサと最初に断言した論文は、“The mechanism of the semicircular canal. A study of the responses of single-fiber preparations to angular acceleration and to rotation at constant speed” by O. Löwenstein and A. Sand, Proceedings of the Royal Society-Series B, London, vol. 129, pp. 256-275, 1940 である。この論文には、エイの一種である雁木と呼ばれる魚を用いて行った実験データが多数記載されており、これらの実験データを整理した結果、実験に用いた半規管の検出可能な最小角加速度は約 $2^\circ/\text{sec}^2$ であると結論付けられている。
- 4) 1940年以後は、上の論文に記載されている結論だけを引用した論文が多く、上の論文に記載されている実験データそのものの正しさや実験データを整理して得られた結論の正しさについて言及した研究論文がほとんど見当たらない。

これらのことから、上記の論文を幾度も読み返し、論文の著者等が結論に至った論理展開の正しさについて検討しました。その結果、実験データから半規管が角加速度のセンサであるとの結論を導く段階で根本的な誤りがあることに気付きました。

該当の論文には、多くの実験データが掲載されていますが、私には、その大部分において、半規管が角加速度のセンサというよりは、むしろ角速度のセンサであることを示しているデータとしか思えませんでした。しかし、該当の論文では、最初から角加速度を検出しているとの前提でデータの整理がなされています。そのため、半規管の検出限界を求める段階で、角加速度の物理量でデータの整理をし、半規管の検出限界を前述の約 $2^\circ/\text{sec}^2$ と、角加速度の単位で記述してしまったようです。この約 $2^\circ/\text{sec}^2$ は、誤った前提に基づいて算出された無意味な数値に過ぎません。何故なら、この数値を求める段階で論理的なミスを犯しているからです。半規管が角速度を検出する時の検出限界は、該当の論文に掲載されている実験データのグラフだけからでは求まらず、新たな実験が必要となります。先入観とは恐ろしいものです。

6. 半規管が角速度のセンサである理由

前述の論文には、多くの有用な実験データのグラフが掲載されています。該当論文の図6に、横軸に経過時間、縦軸に前庭神経の興奮度をとったデータが記載されていますが、このグラフは、経過時間とともに前庭神経の興奮度が正比例して変化するものとなっています。また、該当論文の著者等は、半規管を回転テーブルに載せ、この回転テーブルを等加速度回転させて前庭神経の興奮度を記録しています。

回転テーブル上の半規管も等加速度回転す

ることになりますので、半規管に与えられる角速度は経過時間に正比例して大きくなります。先に述べたように、前庭神経の興奮度も経過時間に正比例して大きくなっていますので、半規管は、角速度を検出していると考えべきであり、角加速度を検出していると考えると、大きな矛盾が生じます。

私の考えの正しさを裏付けるため、魚の半規管を取り出して、管の内径や曲率半径、管の中に入っている内リンパ液と呼ばれる液体の粘性係数、クブラと呼ばれる管内の内リンパ液の動きを検出するダイヤフラムのばね定数等を実測しました。

半規管として、カツオの半規管を用いましたが、解剖の経験がないため、上の力学的物理定数の実測可能な半規管を取り出すまでに数十尾以上のカツオを解剖することとなってしまいました。家内にカツオの頭部が欲しいと言いましたところ、直ぐにカツオの頭部を準備してくれました。しかし、この頭部を解剖しても半規管が見つからないため、幾度もカツオの頭部を家内に準備してもらう必要がありました。その内に、カツオの購入費で家計のやり繰りが大変になったため、魚屋さんからカツオの頭部のみを貰って来るようにしました。何故、見つけ難かったかといいますが、解剖に用いる道具の貧弱さや私の解剖に対する技術の未熟さもありますが、半規管が骨迷路という骨で覆われており、しかも無色透明のため、解剖時に見過ごしてしまっていたからです。一度、半規管のある場所が分かると、後は苦労することなく、半規管を取り出すことが出来ました。

カツオの半規管で実測した力学的物理定数を基に内リンパ液の流れの運動方程式をつくり、前庭神経の興奮度と半規管が回転する時の角速度との関係を計算しました。この計算には、博士課程で学んだ流体力学の知識や計

算機プログラミングの知識が大いに役立ちました。

計算の結果、半規管は角速度のセンサ以外の何物でもないとの結論に達しました。嬉しくなり、私の半規管に関する研究を纏め、1974年4月に開催された医学系の研究者と工学系の研究者の両方が集まる学会で発表したところ、「半規管は角加速度の受容器（センサ）ということは学会で認められていることであり、角速度の受容器などと言い出すのは可笑しい。」と、相手にしてもらえず大変悔しい思いをしました。また、今だから言えますが、この学会発表後しばらくすると、学科内における私への風当たりが強くなり、半規管の研究から遠ざからざるを得なくなってしまいました。

1990年9月に、イギリスのケンブリッジで国際会議があり、この会議場の向かいにある学術図書専門の大きな本屋に立ち寄りしました。店頭には新刊本が多数並べられており、生理学関係の参考書に手が伸びました。この新刊本には、半規管は角速度を検出していると書かれており、半規管を角速度のセンサとする研究論文が参考論文として挙げられていました。そこに挙げられた参考論文は全て1980年以降のものであり、私の半規管に関する研究が早すぎたことを実感しました。

私の研究は、他人がやり始める前に着手したものが多く、暗中模索型の研究のため、必然的に苦労の連続です。しかし、苦労はしますが、研究が上手く行った時の達成感言葉に言い表せないものがあります。そのため、還暦を過ぎた今も、職務の合間をぬって可能な限り研究に時間を当てるようにし、最近では、研究室のスタッフとともに、走ったり飛び跳ねたりする2脚ロボットの開発に励んでいます。

(えむら・たかし)

プランクトン - その語源を調べる -

農学分館長 谷 口 旭



大学4年生になって、いよいよ卒業論文の課題を決めるときがきた。私は、西部太平洋から東部インド洋に生息するプランクトンの分布について研究することに決めた。「プランクトン」は、遊泳力を全くそなえていないか、あっても大変弱いために、水のまにまに漂っている生物だと定義される。この術語はドイツで1887年に創られ、日本では1900年に浮游生物と訳された。私が学生のころの先生方は、学生が浮遊生物と書くと、必ずといってよいほど浮游生物と書き直すよう指導した。それで私も、漢字による意味の違い、ことばの意味の違いを気にするようになった。大学院の学生になって外国の文献に接するようになってからは、英語のことばの語源も気になるようになり、ひまをみつめて図書館へ行き、大きな辞書を見るのが楽しみになった。ここでは、「プランクトン」の語源について調べたことを記してみよう。

大修館書店の廣漢和辭典によれば、「浮遊」という語は“あちこち歩きまわる”、“定職なく流浪する”あるいは“蜻蛉(かげろう)”の意味で、淮南子(紀元前2世紀)や漢書(西暦1世紀)に使われていた。なんともはかなく、頼りない語感である。プランクトンも、なんだか頼りない生物に思えてくる。

この三水(さいずい)を之繞(しんにょう)に変えると「浮遊」になるわけで、それがいけないと学生のころ指導を受けたのであった。

「浮遊」ということばは、後に書き加えられた莊子(荘子)の一篇で“ぶらぶら遊び歩く”の意味で使われており、やはり「浮遊」とはやや意味が異なっている。紀元前4世紀に遡るであろう莊子の内篇は、この世の執着から離れて「遊ぶ」ことの大切さを繰り返し説いているが、その「遊」も後世出版の内篇では「遊」と書かれている。こうして「浮遊」も「浮遊」も“浮かび漂う”の意味を有するようになり、プランクトンにふさわしい語となった。今日の日本では、「遊」の字は当用漢字外におかれ、ますます「浮遊生物」と書くことが多くなった。ま、これでプランクトンも気が楽になっただろうと、あきらめざるをえないのかもしれない。

欧語の *Plankton* の語源は、ギリシア語の *πλαγκτος* である。Oxford English Dictionaryによると、その意味は“wandering, roaming”と書かれている。それから70年ほどして、英国のプランクトン学者が、このギリシア語は英語1単語では表わしえない、複雑な意味を持っていたことに気がついた。それは“that which is made to wander or drift”すなわち、自分の意志を超越した、あるいは自分ではやめたいと思っても止めることを許されない放浪を意味していた、と。古典ギリシア文学に親しんだ人ならば、ここで反射的にオディッセウスやオイディプス王の物語を思い浮かべるであろう。学生時代の私も、その一人であった。

意外なことに、微小な *Plankton* と巨大な *Planet* (惑星) は同根の語である。このことは、原義は人間の放浪だけを指すものではな

かったことを示している。たとえば、ホメーロスのイーリアスでは、拙い手綱さばきのため、馬が進路を外れて迷い走るときにも、この語が使われている。オディッセイアには、航海の難所である「漂い岩」のことがでてくる。両側から動いてきて、間を通ろうとする船をこなごなに砕いてしまう、恐ろしい岩である。英訳本では“Wandering Rocks”と、引用符付きで書かれる。たしかに、この語は人間以外の動物や岩山にも使われることがあったのだ。そうしてみると、不変の黄道12宮の間をさまようように動く星を「惑星」と名づけたのも、不思議ではない。しかし、何とんでもこの語感がぴたりするのは、オディッセウスの漂流とオイディプス王の放浪だろう。

オディッセウスは木馬の策略でトロイを落した。それでトロイについていた神々が怒り、彼の故国への航海を乱し、島々への漂着を繰り返させた。その途中で、まずいことにオディッセウスは海神ポセイドンの子である人食い巨人の片目をつぶしてしまい、海神の深い恨みをかってしまった。やがてトロイの神々が彼を許そうとしたときにも、海神だけは彼を許さず、故国への航海を終わらせようとはしなかった。女神カリュプソの島から出港したオディッセウスをみまんだ大嵐には、海神の凄まじい憎悪がこめられていた。こうして、オディッセウスは十年ものあいだ漂流を続けなければならなかった。オディッセウスの漂流は、神の意志だったのである。

この物語は、古典ギリシアの精神風土をいまに伝える叙事詩として、また、手に汗にぎる海洋口マンとして、多くの人々に読まれてきた。余談ながら、科学史の分野では、オディッセイアとイーリアスを、紀元前10世紀ころのギリシア人が持っていた地中海地理に関する知識を示す文献ともみなしている。

この二書をはじめとする古典ギリシアの文芸作品を読むと、当時のギリシアの人々が運命論者であったことがわかる。ホメーロスはオディッセイアの中で、オディッセウスのような人間を“おのれの愚かさゆえに、定めをこえた苦勞をなめている”と大神ゼウスに評させている。ひとは神の定めに従わなければならないのだった。また、悲劇オイディプス王のなかでは、自分がしてきたことに疑念を感じはじめたオイディプス王に向かって、妃イオカステは“神様が必要としてお求めになるものは、たやすく神ご自身で顕わされるでしょう”と諭す。ひとはみな、神の定めによって生きているのだという安堵感を回復するように。これらの物語は、人々の行いを神が定めあやつっていること、トロイでの大きな戦争までもがトロイとアカイア（ギリシアの古名）の守護神同士の確執によって戦われていたことなどを、繰り返して示している。神々が定め望む運命から、人々は逃れることができなかった。それがどんなに過酷な運命であろうと、神を恨むことなく、受け入れるのであった。最も悲惨な運命は、オイディプス王のそれである。予言が語る恐ろしくも残酷な運命を彼から遠ざけようと、周りの人々が懸命に努力したにもかかわらず、彼は知らずに父を殺し、母を妃とし、それと知って自ら盲目となって放浪しなければならなかった。神が必要として求めたとおりに。

そういう物語だから、オディッセイアとオイディプス王の物語には、*πλάγκτος*の派生語がたくさんでてくる。オクスフォードのA Greek-English Lexiconでこの語を調べると、引用例の多くがこれら二書に起源していることがわかる。オディッセウスとオイディプス王は、もちろん吟遊詩人のように好んで放浪の旅にでたのではない。神の意志によって、さまようことを運命づけられていたので

あり、故郷へ帰りたくても帰ることはできず、留まりたくてもとまることを許されなかったのだ。それが、この語にこめられた古典ギリシア独特の宗教観であったと理解できる。宗教観を異にする英語や漢語にこのニュアンスがないとしても、それは無理からぬことである。では、このギリシア語を語源とするプランクトンも、哀れな放浪者なのか。もちろん、そうではない。

海は、深い。世界の海を平均するとおよそ4キロメートルの深さになるが、明るいのはその表層たかだか100メートルに過ぎない。光合成で生きる植物は、だから表層に浮遊しつづけなければならない。しかし、生物の身体をつくっている原形質は、海水よりも必ず重い。どうすれば浮遊してられるのか。たった一つだけ、方法がある。小型になることである。小型になれば、体積（重量）に対する表面積の比が大きくなる。表面では海水とのあいだに摩擦が起こるから、表面積比が大きければ、沈みにくくなるのだ。だから、大洋の植物はみな粉のように小さい。それを、「プランクトン」と名づけたのである。植物プランクトンが海洋環境に適応して繁栄するおかげで、あらゆる海の生物の生存が可能に

なっている。今では、植物プランクトンの光合成は、大気中の二酸化炭素を海中へと除去する過程だともみなされるようになった。

プランクトンはいかにも繊細だが、プランクトンなしには、海洋生態系は成立しないし、地球環境を守ることもできない。プランクトンは、確かに浮遊することを運命づけられており、その定めから逃れることはできない。しかし、彼等こそが生態系の支配者であり、地球環境の守護神なのである。はかなさ、悲惨さは、微塵も感じさせない。

主な参考文献（辞書はのぞく）

- Chapman, T.G. (1887) *Homer's Iliad*, George Routledge & Sons, London, 387 pp.
Cotterill, H.B. (1911) *Homer's Odyssey*, George G. Harrap & Co., London, 334 pp.
Hardy, A. (1956) *The Open Sea: The World of Plankton*, Collins, London, 335 pp.
呉 茂一 (1961) 「イーリアス」, 世界文学大系 1, 筑摩書房, 東京.
金谷 治 (1971) 莊子第一冊 [内篇], 岩波文庫, 青206・1, 岩波書店, 東京.
高津春繁 (1959) 「オイディプス王」, 世界文学大系 2, 筑摩書房, 東京.
高津春繁 (1961) 「オディッセイア」, 世界文学大系 1, 筑摩書房, 東京.

(たにくち・あきら)

本館所蔵秋田家史料の目録作成とデータベース化

情報シナジーセンター学術情報研究部 曾根原 理
 附属図書館情報企画掛 照内 弘通

1. 「秋田家史料」とは？

「秋田家史料」とは、秋田家（旧三春藩主家）に伝来した古文書・蔵品などの総称である。各史料の成立年代は中世末期から近代に及ぶが、大半は江戸時代の成立である。

秋田家は、安藤（または安東）を本姓とする、古代以来の系譜を誇る一族である。伝承では、古代陸奥国俘囚の長であった安倍貞任を先祖とする。中世には、今の秋田県北部から青森県全域、北海道南部までを勢力圏とし、津軽十三湊（現在の青森県北津軽郡市浦町付近）を本拠とする活発な交易活動で知られていた。「蝦夷管領」「日の本將軍」とも称されたという。その後一族は、南部氏の進出にともない出羽国北部（現在の秋田市周辺）に本拠地を移した。

戦国時代の秋田氏は、織田信長と音信を交わし、豊臣秀吉の全国統一時にその支配下に入った。旧領5万石ほどに加え、豊臣蔵入地2万石余の代官を務め、秋田杉の供給に携わった。慶長5年（1600）の関ヶ原合戦では徳川方についたが、2年後に、改易された佐竹氏と交代で常陸国宍戸に国替となった。さらに正保2年（1645）に陸奥国三春に移り、明治維新まで藩主として君臨した。

秋田家史料はこうした歴史を反映して、系図、歴代肖像画などの一族に関わる史料、内書や知行目録、様々な書類や書簡などの領主としての活動を反映した文書、歴代当主が収集した古筆類や歌書、芸能伝本などの蔵品を含み、好学な家風と北奥の地域性の感じられる内容となっている。

2. 整理と冊子体目録作成の経緯

秋田家史料が東北帝国大学に寄託されたのは、昭和14年（1939）夏であった。当時、法文学部に設置されていた奥羽史料調査部（現在の文学部東北文化研究室の前身）では、奥羽地方から北海道、カラフト、千島列島などの北方史研究が行われており、その活動の一環として旧子爵秋田家から寄託をうけたという。翌年には、代表的な33点について展示会が催された。さらに2年後には、当初から整理・調査にあたった大島正隆の手で、慶長7年（1602）以前に成立した史料の目録が作成された（『文化』9・9所載）。

昭和30年には、古文書や蔵品の大半が国有財産として購入された。その後、部分的には調査が進み自治体史（秋田県史、三春町史など）などに情報が掲載された。しかし、史料全体の目録作成は、調査に時間を取られて遅々として進まなかった。昭和55年（1980）から57年にかけて、図書館職員の手でカード体の目録が作成されたが、出納のための最小限の情報しか含まれず、また未整理部分を多く残していた。

その後、平成11年（1999）から2年間、日本近世史専攻の大藤修教授（大学院文学研究科）のご協力を得て、大学院生の古文書演習の時間に、秋田家史料未整理分の整理作業を進めることとなった。それにあわせて、受入済部分についても書誌を増補改訂し、未整理部分の点検作業などを曾根原が担当した。こうした経緯を経て、平成13年（2001）の8月に、冊子体の『秋田家史料目録』（東北大学

附属図書館，A 4 版91頁）が刊行されることになった。

3．データベース試行版の作成・公開

冊子体目録の内容をホームページで公開することは，当初からの方針であり（『秋田家史料目録』「公刊によせて」参照），目録刊行後の平成13年秋，資料の電子化を職務とする電子情報掛（現在は改組により情報企画掛）の照内を担当者として着手された。

当時すでに，図書館では，狩野文庫や漱石文庫の目録データベースが，OPENTEXTというソフトウェアで公開されていた。しかし，目録検索はできても，リスト形式で一覧表示するという基本的な機能は備えておらず，どのような書名の資料が所蔵されているのかを利用者に知らせないまま，キーワードを入力して検索させるという，不親切なものであった。そこで，秋田家史料に関しては，リスト形式での公開を第一とし，付加的に検索機能を備えることとした。

まず，曾根原から冊子体目録の原稿であるExcel ファイルの提供を受け，将来的なデータベース化を想定して，1 データとなっていた「差し出し」と「宛先」のデータを分割したり，和暦から西暦データを変換生成するなどの作業を行なった。曾根原からの指示は，冊子体目録の並び順で公開されればよいとのことであったが，利用者のことを考えれば，標題順，年代順のリストもあったほうがよいと考え，相談の上で追加した。HTML 形式のファイル作成にあたっては，Excel ファイルから，1 ページ表示件数ごとにファイルを自動生成できるように簡易プログラムを作成した。また，書状十数点をデジタルカメラで撮影し，試験的に掲載した。

次に，検索システムについては，他機関の貴重資料等の公開サイトを調査し，Win-

dows パソコンでも設置できる手軽さから，ファイルの全文検索ができるサーチエンジン Namazu を利用することにした。その際，なるべく利用者の意図する検索結果を得られるように，項目を指定した検索ができるよう工夫した。

平成14年（2002）3月，関連教官に通知し，学内での試験公開を行なった後，3月18日に「秋田家史料目録データベース（試行版）」という名称で一般に公開した。

4．試行版の利用状況

2002年3月から2003年4月末までの約1年間，試行版という形でデータベースを公開したわけだが，その利用状況をサーバのアクセス記録から検証してみる。

総アクセス数は72,100件で，図1のように，2003年になってからアクセス数が急増している。試行版ということで，ロボットによる検索エンジンではヒットしない設定にしていた割にはアクセスが多いように思われる。

上位のアクセス内訳は図2のようになっている。年代別リスト，標題順リストも見ていただけただけようだ。分類別リスト（内書・領知宛行状・領知目録）や豊臣秀吉朱印状（知行宛行）の詳細表示へのアクセスが多いのは，試験的に画像が掲載されていたからと考えられる。キーワード検索は予想以上に利用があり，553の異なったキーワードが確認された。上位の内容は図3のとおりである。

一方，図4のように，アクセスされた時間帯に極端な差はなく，インターネットで広く一般に公開することが有意義であることを，改めて確認できる結果となっている。

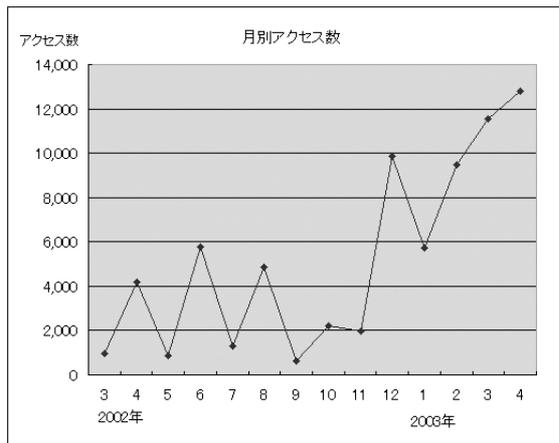


図1 試行版アクセス統計

	アクセスページ	アクセス数
1	トップページ	3,850
2	分類別リスト	882
3	キーワード検索	772
4	公刊によせて	588
5	解題	488
6	年代別リスト	436
7	標題順リスト	370
8	目録表紙画像	360
9	分類別リスト(内書・領知宛行状・領知目録)	340
10	凡例	324
11	分類別リスト(系図)	294
12	分類別リスト(地図・絵図)	212
13	詳細(豊臣秀吉朱印状(知行宛行))	210
14	分類別リスト(藏品/名家筆跡)	184
15	分類別リスト(領主文書/秋田時代)	178
16	分類別リスト(家文書/肖像)	174
17	年代別リスト(1580年代以前)	174
18	分類別リスト(家文書/官位叙任)	168
19	年代別リスト(1590年代)	162
20	分類別リスト(藩主筆跡等)	150

図2 アクセスページ Best 20

	キーワード	件数
1	+ dai : 秀吉	53
2	古今和歌集	32
3	鳥の絵	27
4	武家諸法度	25
5	小野寺	23
	豊臣秀頼	23
7	武者絵	22
8	梵字	21
9	徳川家光	20
10	禄高	19
11	本阿弥光悦	16
12	古筆	15
	秀吉	15
14	源氏物語 + 和歌	14
15	遠州流	13
	公案	13
	手鑑	13
	和漢朗詠集	13
19	松平信綱	12
20	羽賀寺	11
	扶持	11

図3 検索キーワード Best 20

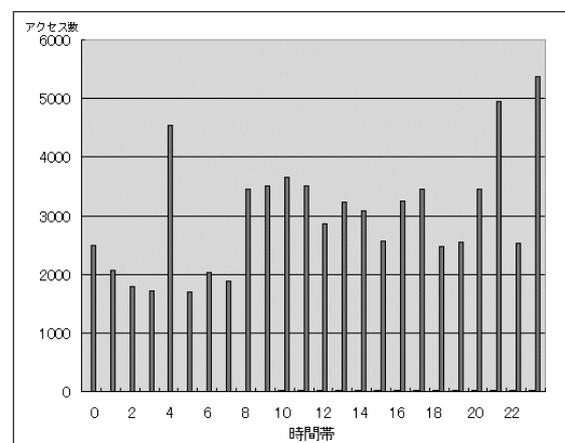


図4 時間帯別アクセス状況

5. 画像データの作成

その後、秋田家史料の貴重性が学内に知られていったこともあり、文科系教官4名のチームが平成14年度の「東北大学研究基盤経費」を獲得し（代表：大村泉大学院経済学研究科教授）本館所蔵貴重書の画像データベース化に着手した際に、約400点の史料画像を撮影してデジタル化を進めることとなった。作業は4名のうち、曾根原と、日本中世史専攻の柳原敏昭助教授（大学院文学研究科）が担当し、大学院生などのアルバイトで撮影を行い、専門の業者によってデジタル情報として加工された。撮影場所としては附属図書館2号館の一室を使用し、研究基盤経費で購入したデジタルカメラや無反射ガラスを使用して進めた。出納は閲覧第二掛、情報処理は情報企画掛の協力を仰いだ。

6. データベースの改訂

平成15年3月、画像データの納品（約400点、1200画像）を受けて、データベースを全面的に構成し直し、試行版同様、4月に学内

公開した後、5月8日に一般公開した。今回から画像データベースとしての性格も加わったことから、名称を「秋田家史料データベース」に変更した（図5）。

改訂作業は、まず、MySQLというソフトウェアを使用してデータベース化を図ることから始めた。その際、解説文や画像表示を制御するためのデータも数項目加えた。これによって、データを自在にリスト化できるようになり、複数のキーワードによる検索や、項目を組み合わせた検索が可能となった。また、試行版に比べて精度・速度とも格段に向上した。

次に、画像の表示については、利用者の便宜を考え、いくつかの工夫を行った。第1に、画像が見られる場合は、各種リスト及び検索結果一覧に「カメラ」のマークを付けて一目でわかるようにし、これをクリックすると画像が表示されるようにした（図6・図7）。

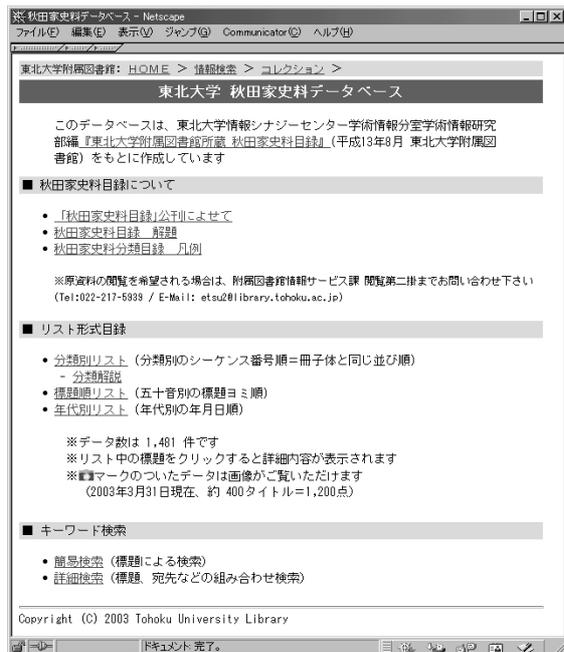


図5 秋田家史料データベース

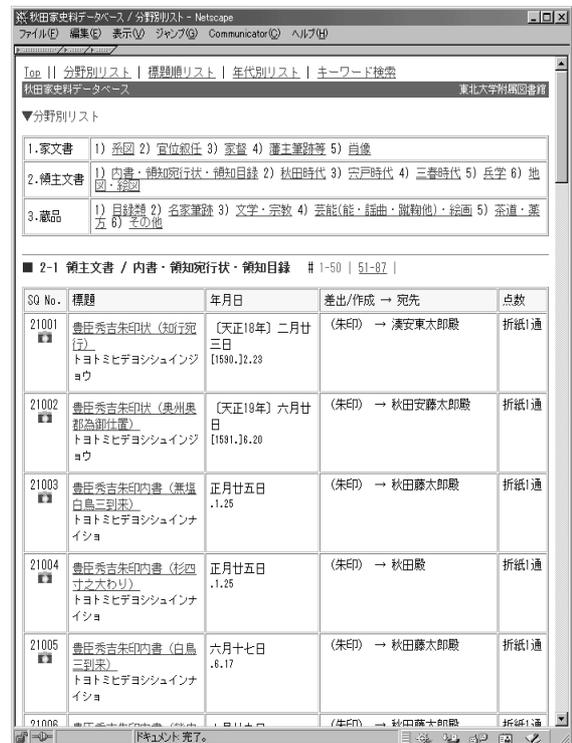


図6 分類別リスト



図7 検索結果の簡略表示

第2に、目録の詳細表示にサムネイル画像（索引的な小画像）を表示することで、資料の分量、記述されている文字やレイアウトといった全体の雰囲気がつかめるようにした。サムネイル画像は、横スクロール操作が少なく済むように、適当な量で折り返すとともに、裏面の画像がある場合は、段を分けて表示するように制御している（図8）。そして、



図8 書誌詳細画面

各サムネイル画像をクリックすると、中間サイズの画像が表示されるようにした。

第3に、この中間サイズの画像を表示する画面では、サムネイル画像を常に表示しておくことで、全体のなかのどの部分を拡大しているのかがわかるようにした（図9）。また、中間サイズ画像をクリックすると、さらに細かい部分まで鮮明に見られる拡大画像が表示できるようにした。ただし、これは画像サイズがかなり大きいので、学外では表示に結構時間がかかると思われる。さらに、この画面からは、翻刻データがあればリンクするようにしてある。翻刻は画像と対比させるために縦書きが強いられ、プレーンなHTMLでは制御が難しいので、Word ファイルをPDF形式に変換して掲載している。翻刻作業は時間を要するので、現在は試験的に1点しか公開していないが、翻刻した文字をデータベースに登録すれば、本文中の言葉で検索することも可能なので、今後、研究者による翻刻作業が進むことに期待したい。

そのほか、全体として、画像や解説、翻刻などへのリンク表示は、その情報が存在する

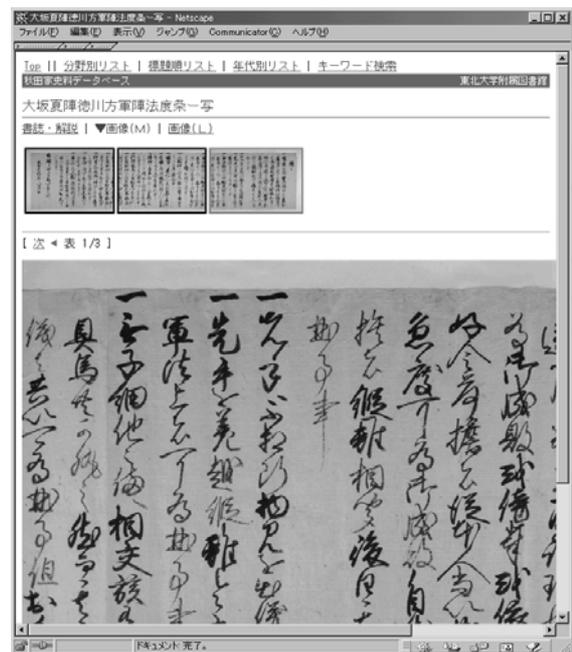


図9 中間サイズ画像表示画面

場合にのみ表示されるようにした。以前、他のサイトを調査した際に、すべての書誌に「詳細表示」などのリンクが張ってあるにもかかわらず、アクセスしてみるとほとんどデータがなく不審に感じた経験があったため、その点を配慮した。

7. 今後の展望

平成14年度には約400点の画像を加えることができたが、秋田家史料全点の画像データベース化のためには、その数倍の撮影・画像処理等が必要である。残念ながら、資金面の問題から、その後の画像追加については予定が立てられないでいる。今後、学内外の経費獲得を試みていきたいと考えている。

一方、冊子体目録発行から2年近くを経て、単純な誤植に加え、研究者の御指摘等による改定の必要な箇所が生じてきた。データベースについては、その長所を生かし、逐次最新の情報に改定を行っている。一方、冊子体についても、機会を見て正誤表作成等に対応す

る必要が生じると思われる。今後も、個別研究の進展や自治体史編纂などに伴う新事実の発見、要訂正箇所の判明が見込まれることから、データベースの特質を生かし素早く適切な反映を期していきたい。

なお、情報シナジーセンター学術情報研究部では、データベース等に格納された学術情報の分析・利用結果をメタ情報として活用する手法や、メタ情報を自動的に連携・協調させて学術情報の高度な利用を支援する機構等について検討を進めている。今後の課題として、そうした成果をいかに本データベースに生かしていくか、ということも考えていきたい。

[注] 執筆担当：1, 2, 5, 7 曾根原,

3, 4, 6 照内

秋田家史料データベース URL:

<http://www2.library.tohoku.ac.jp/akitake/>

(そねはら・さとし)

(てるうち・ひろみち)

平成14年度参考図書購入報告

参考図書費（文部科学省参考図書費，本学共通経費，川内地区部間共通費等）により平成14年度に購入し、本館レファレンス・コーナーに配置した参考図書のうち主な資料を下記のとおりお知らせします。

（情報管理課）

◆ 主な継続受入資料 ◆

CD-HIASK：朝日新聞記事データベース 2001
官報総索引 2001
国語年鑑 2002
雑誌新聞総かたろぐ 2002年版
出版年鑑 + 日本書籍総目録 2002年版
Biological Abstracts. 2002
Commonwealth universities yearbook. 2002
Comprehensive dissertation index. 2000
Contemporary authors. 2002
Deutsche Nationalbibliographie. Reihe E, Monographien und Periodika. 1996-2000 全25巻
Encyclopaedia Indica : India, Pakistan, Bangladesh. 91-130 全40巻
The Europa world year book. 2002
IBN. Pars C, Corpus alphabeticum. 1, Sectio generalis. 2001
The International who's who. 66(2003)
Internationale Bibliographie der Zeitschriftenliteratur aus Allen Gebieten des Wissens(IBZ)36-37(2000-2001)
Mcgraw-Hill yearbook of science and technology. 2002-2003
The National faculty directory. 2003
Whitaker's books in print. 2002
Who's who in France. 34(2002-2003)
The World of learning. 53(2003)

◆ その他の主な受入資料 ◆

芥川龍之介大事典
現代学校教育大事典 新版 全7巻
雑誌記事索引集成：明治大正昭和前期 人文科学編 全58巻
中国大学全覧 2002
日本学士院所蔵和算資料目録
World philosophers and their works 全3巻

平成14年度特別図書購入報告

特別図書購入費（文部科学省配分）によって下記資料を購入し、本館に備え付けましたのでご利用ください。

(情報管理課)

番号	資料名	内容	出版形態
1	カールマルクス・およびフードリヒ・エンゲルスの『資本論』諸草稿，自用本欄外書込マイクロフィルム	社会史国際研究所（アムステルダム）及びロシア国立社会＝政治史アルヒーフ（モスクワ）が所蔵するマルクスの主著『資本論』全3巻に関連する膨大な草稿群，自用本欄外書込を収録している。	マイクロフィルム
2	日本の絵巻物 信貴山縁起絵 全3巻	朝護孫子寺所蔵，国宝『信貴山縁絵』の原寸大復刻本。卷子（画卷）デジタル・オールカラー。	図書
3	日本の絵巻物 平治物語絵 全3巻	三分蔵されている『平治物語絵』（『三條殿夜討巻』ボストン美術館，重文。『信西巻』静嘉堂文庫美術館，重文。『六波羅行幸巻』東京国立博物館，国宝。）の原寸大復刻本。卷子（画卷）デジタル・オールカラー。	図書
4	British Archaeological Reports. International Series. 32 Vols. （英国考古学レポート）	考古学・人類学における先駆的な研究報告がなされている。研究対象とする時代は，旧石器時代から近代までと幅広い。研究対象地域は，欧米を中心に，アフリカ，アジア，シベリアなど多様である。	図書
5	J. ラスキン著 『ヴェネツィアの石』全3巻	同時代の美術家たちにも大きな影響を与えた19世紀イギリスの美術・建築評論家ジョン・ラスキンが，イタリア旅行した後，著したヴェネツィアの美術・建築の書。	図書
6	Dissent : A Quarterly of Socialist Opinion. (社会学者論集) Vol.1 - 43, Vol.44. No.3	ミCHEL・コーエンとマイケル・ウォルツァー編 政治と文化に関する季刊誌であり，数ある政治雑誌のなかでもアメリカ知識人がもっとも定期的に購読する雑誌。	図書
7	発達心理学・臨床心理学 参考図書シリーズ 全9巻	出生前から高齢期にわたる人間発について，認知発達・社会発達・脳と行動との関連などの発達心理学カウンセリングなどの臨床心理学に関する中心的なテーマの最新の論文が収録されている。	図書
8	L'Actualité Juridique. Droit Administratif. (行政法雑誌) Vol. 34-56	フランス行政法に関する最も基本的な雑誌の一つ。	図書
9	Intellectual Legacy of Management Theory. (経営理論の知の遺産) Series 2 : Taylor System and Scientific Management. 14Vols.	現在でも経営学者と経営実践家が一度は熟読しているといわれているテイラー・システムとテイラリズムに関する多くの文献を集成した貴重なコレクションの一部。	図書
10	Annals of Cambridge. (ケンブリッジの年代記) 5 Vols.	中世からヴィクトリア期にかけて同市で導入された条例・法令集。 同市の財政・救貧法関連資料。	図書

番号	資料名	内容	出版形態
11	The Works of Thomas de Quincey. (トマス・ド・クインシー著作集 第2期) Vol.8-9, 12-14, 17-18	ロマン主義時代の作家・批評家ド・クインシーの初の本格的な全集。	図書
12	Current Issues in Linguistic Theory. (言語理論における最近の問題) 216, 218, 220-223, 227	主にヨーロッパにおける国際的言語学会で発表された論文をまとめたもの。バランスよく様々な理論的立場の学会がとりあげられており、現在どのような問題がもっとも関心を集めているかがわかる。	図書
13	Literary sources & Documents Series. (英米の文芸・文化思潮/原典と資料) 12 Vols.	昨今の文学研究は、大きく文化研究の中で、位置づけられるようになり、文学・文化研究にはますます歴史的考察が欠かせなくなっている。アメリカ文学の背景を知る貴重な資料。	図書
14	Early English Books. STC2. (近世初期英語印刷文献集成) Unit 120-122.	清教徒革命から王政復古に至る期間の英国初期刊本を集成したもの。	マイクロフィルム
15	Parliamentary Debates(Hansard) House of Commons. (英国議会上院議事録) 6th ser., Vols.370, 373-381	英国議会上院における会期ごとの議員の発言・討論を逐語的に収録したもの。	図書

第34回国立大学図書館東北地区協議会総会

標記会議が、4月24日(木)・25日(金)福島大学を会場として東北地区7大学から20名が参加して開催され、次の協議題について協議が行われた。

- 1) 第50回国立大学図書館協議会総会に向けての準備事項について
- 2) 法人化後の国立大学図書館協議会のあり方について
- 3) 学内学術情報へのメタデータ付与体制について
- 4) 法人化に向けて附属図書館の取り組み状況について
- 5) 次期当番館について
その結果、次のとおり決定した。
1. 文部科学大臣に対して特に要望すべき事項
- 1) 平成14, 15年度と電子ジャーナル導入に関する予算措置(ライフサイエンス, 情報通信, ナノテクノロジー・材料分野)がなされているが、平成16年度も拡大(環境科学など)して予算措置がなされるよう要望する。

- 2) 近年、減額傾向にある学生用図書経費について、増額を要望する。
- 3) 学術情報ポータル機能の整備を要求する。
- 4) 学術図書総合目録データベースの整備を要望する。
2. 総会の分科会で検討するための協議題
- 1) 第1分科会「法人化後の国立大学図書館協議会のあり方について」
- 2) 第2分科会「法人化に向けての附属図書館のあり方について」
3. 平成15年度地区選出の理事候補館名及び所属部会
 - ・福島大学(第1部会)
 - ・東北大学(第2部会)
4. 平成15年度地区連絡館名
 - ・東北大学

(総務課)

特別企画展「夏目漱石 - 漱石文庫に見る文豪の生涯 - 」を開催

附属図書館本館では、2003年4月8日（火）から14日（月）までの5日間、特別企画展「夏目漱石 - 漱石文庫に見る文豪の生涯 - 」を開催しました。今回の展示会は、新入生図書館オリエンテーションと合わせての開催であったため、特に新入生に本館コレクションの素晴らしさを知ってもらうことができました。また新入生のみならず、在校生、教職員、市民の方々からも好評をもって迎えられ、1000名に近い来場者がありました。

展示会の構成では、「漱石文庫」の資料を年代順に配列することにより漱石の生涯をたどることができるよう配慮しました。さらに、漱石が英国留学中に妻・鏡子に送った書簡など、新たに受け入れた資料の一般公開をも合わせて行ないました。新規に受け入れた資料は、今秋の本館企画展でより大きな規模での公開を予定しています。

また、今回の展示会にあたり、ご指導いただきました諸先生方に、この場をかりてお礼申し上げます。

主な展示資料

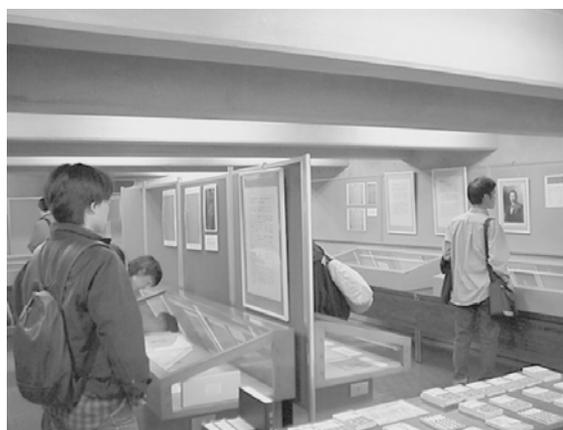
1. 漱石の「顔」
 - ・ 漱石デスマスク
 - ・ 岡本一平画『漱石先生』
 - ・ 漱石自画像入り葉書土井林吉（晩翠）宛て
2. 漱石の学生時代
 - ・ 自筆身体検査の記録
 - ・ 弁論原稿 *The Death of My Brother*
 - ・ Dixon, J.M. *Dictionary of idiomatic English phrases*
3. 漱石の松山・熊本での教師時代
 - ・ *General Plan*
 - ・ 法科2年 1896.6.24
4. 漱石の英国留学時代
 - ・ 自筆イギリス資料
 - ・ 鏡子あて書簡 明治33年1月22日（新規受入）
 - ・ 鏡子あて書簡 明治33年9月27日（新規受入）
 - ・ 鏡子あて書簡 明治33年10月22日（新規受入）
 - ・ 鏡子あて書簡 明治34年5月8日（新規受入）
 - ・ 鏡子あて書簡 明治35年4月17日（新規受入）
 - ・ オックスフォード大学水彩画（新規受入）

5. 漱石から娘たちへ
 - ・ 筆子・恒子・えい子あて書簡（写し） 明治43年9月11日（新規受入）
 - ・ 夏目えい子あて葉書 大正元年8月11日（新規受入）
6. 漱石の蔵書
 - ・ Dickens, C. *A Tale of Two Cities*
 - ・ Shakespeare, W. *Shakespeare's Tragedy Hamlet*
 - ・ *The Holy Bible*
 - ・ 正岡子規『獺祭書奥俳話』
 - ・ 寺田寅彦『海の物理学』
 - ・ 芥川龍之助『羅生門』
7. 漱石の作品
 - ・ 『吾輩は猫である』
 - ・ 『三四郎』
 - ・ 『こゝろ』

（情報サービス課）



吉本総長もご来館されました



展示会場の光景

会 議

学 内

15. 6.13 平成15年度第1回附属図書館商議会

・協議事項

(1) 学生用図書整備検討委員会(仮称)の設置について

(2) 平成15年度東北大学研究基盤経費の申請について

(3) その他

1) ゼミナール受講生(2年生)の本館書庫利用について

・報告事項

(1) 平成15年度図書館運営費(共通経費)等について

(2) 平成15年度図書館資料費の配分について

(3) 附属図書館中期目標・中期計画について

(4) 学術情報整備検討委員会及び学術情報資料選定小委員会の報告について

(5) 平成15年度学術情報整備計画について

(6) 平成15年度遡及入力計画について

(7) 平成14年度学術情報の整備状況等について

(8) 各分館からの報告について

(9) その他

1) 研究者等作成データベースの受入・公開について

2) 和算資料全文画像データベース作成について

3) 田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示について

4) 平成15年度図書館オリエンテーション等について

5) 漱石特別展について

6) 平成15年度企画展について

15. 6. 5 平成15年度第1回分館長会議

・協議事項

1) 平成15年度図書館資料費の配分について

2) 附属図書館中期目標・中期計画(案)について

3) 学生用図書整備検討委員会(仮称)の設置について

4) 平成15年度東北大学研究基盤経費の申請について

5) 平成15年度第1回附属図書館商議会について

・報告事項

1) 平成15年度図書館運営費(共通経費)等について

2) 学術情報整備検討委員会及び学術情報資料選定小委員会の報告について

3) 平成15年度学術情報整備計画について

4) 平成15年度遡及入力計画について

5) 図書館情報処理システムの更新にかかる日程及び体制について

6) 田中耕一氏ノーベル賞受賞記念展示について

附属図書館商議会商議員名簿

平成15年4月1日現在

所 属	氏 名	任 期
図 書 館 長	大 西 仁	官 職 指 定 (14.11. 6~16.11. 5)
図 書 館 副 館 長	今 泉 隆 雄	官 職 指 定 (14.12. 1~16.11.30)
医 学 分 館 長	飯 沼 一 宇	官 職 指 定 (11.12. 1~15.11.30)
北 青 葉 山 分 館 長	井 原 正 隆	官 職 指 定 (15. 4. 1~17. 3.31)
工 学 分 館 長	江 村 超	官 職 指 定 (15. 4. 1~17. 3.31)
農 学 分 館 長	谷 口 旭	官 職 指 定 (15. 4. 1~17. 3.31)
情報シナジーセンター長	根 元 義 章	官 職 指 定 (13. 4. 1~17. 3.31)
事 務 局 長	長谷川 裕 恭	官 職 指 定 (14.11.6~)
文学研究科教授	鈴 木 岩 弓	14.10. 1~17. 3.31
教育学研究科教授	宇 野 忍	15. 4. 1~17. 3.31
法学研究科教授	大 内 孝	15. 4. 1~16. 3.31
経済学研究科教授	照 井 伸 彦	15. 4. 1~17. 3.31
理学研究科教授	倉 本 義 夫	11. 4. 1~16. 3.31
医学系研究科教授	里 見 進	11. 4. 1~16. 3.31
歯学研究科教授	奥 野 攻	13. 4. 1~17. 3.31
薬学研究科教授	根 東 義 則	14. 4. 1~16. 3.31
工学研究科教授	岸 野 佑 次	15. 4. 1~17. 3.31
農学研究科教授	國 分 牧 衛	15. 4. 1~17. 3.31
国際文化研究科教授	島 途 健 一	15. 4. 1~17. 3.31
情報科学研究科教授	日 合 文 雄	13. 4. 1~17. 3.31
生命科学研究所教授	嶋 田 一 郎	15. 4. 1~17. 3.31
環境科学研究科教授	千 田 侖	15. 4. 1~17. 3.31
教育情報学研究部教授	村 木 英 治	14. 4. 1~16. 3.31
金属材料研究所教授	後 藤 孝	15. 4. 1~17. 3.31
加齢医学研究所教授	佐 竹 正 延	14. 4. 1~17. 3.31
流体科学研究所教授	徳 山 道 夫	14. 4. 1~16. 3.31
電気通信研究所教授	矢 野 雅 文	10. 4. 1~16. 3.31
多元物質科学研究所教授	平 澤 政 廣	15. 4. 1~17. 3.31
東北アジア研究センター教授	瀬 川 昌 久	14. 4. 1~16. 3.31
大学教育研究センター教授	関 内 隆	8. 4. 1~17. 3.31

人 事 異 動

平成15年 6月30日現在

発令年月日	新 官 職	氏 名	旧 官 職	備 考
15. 3. 31		吉 藤 正 明	北青葉山分館長	任期滿了
"		奥 脇 昭 嗣	工学分館長	"
"		大 森 迪 夫	農学分館長	"
15. 4. 1	北青葉山分館長	井 原 正 隆		併 任
"	工学分館長	江 村 超		"
"	農学分館長	谷 口 旭		"
"	横浜国立大学附属図書館情報管理課長	三 池 愼三郎	情報管理課長	転 出
"	情報管理課長	諏訪田 義 美	北海道大学附属図書館情報システム課長	配置換
"	総務課庶務掛長	宮 本 博 芳	多元物質科学研究所総務課人事掛長	"
"	医学部附属病院医事課専門職員	佐 藤 武 彦	医学分館総務掛長	"
"	医学分館総務掛長	尾 形 博	経済学部・経済学研究科会計掛長	"
"	宮城教育大学附属図書館整理係長	菅 原 淑 子	北青葉山分館整理・運用掛長	転 出
"	北青葉山分館整理・運用掛長	森 脇 ち か	工学分館整理・運用掛長	配置換
"	工学分館整理・運用掛長	相 川 晶 子	農学分館図書掛長	"
"	農学分館図書掛長	佐 藤 百 代	宮城教育大学附属図書館整理係長	転 入
"	文部科学事務官(情報シナジーセンター学術情報支援掛)	菅 原 透	文部科学事務官(情報サービス課参考調査掛)	配置換
"	文部科学事務官(医学分館運用掛)	湯 目 昌 史	文部科学事務官(情報サービス課相互利用掛)	"
"	文部科学事務官(情報サービス課相互利用掛)	高 橋 菜穂子	文部科学事務官(工学分館整理・運用掛)	"
"	文部科学事務官(農学分館図書掛)	塚 田 弘 子	文部科学事務官(医学分館運用掛)	"
"	文部科学事務官(宮城工業高等専門学校庶務課図書係)	近 藤 真澄美	文部科学事務官(農学分館図書掛)	転 出
"	文部科学事務官(工学分館整理・運用掛)	川 崎 恵 美	文部科学事務官(宮城工業高等専門学校庶務課図書係)	転 入
"	文部科学事務官(情報サービス課閲覧第一掛)	後 藤 敏 行		採 用
"	事務補佐員(工学分館管理掛)	菊 地 裕 子	事務補佐員(情報管理課図書情報掛)	配置換
"	事務補佐員(情報管理課図書情報掛)	原 千代子	事務補佐員(情報サービス課参考調査掛)	"
"	事務補佐員(情報サービス課参考調査掛)	今 泉 みはる	事務補佐員(工学分館管理掛)	"
"	事務補佐員(総務課情報企画掛)	岩 井 美紀子	事務補佐員(総務課庶務掛)	"
"	事務補佐員(北青葉山分館整理・運用掛)	湯 田 美喜子		採 用
15. 6. 1	事務補佐員(情報管理課受入掛)	我 妻 江 美	事務補佐員(情報管理課雑誌情報掛)	配置換

編 集 後 記

新入生オリエンテーション、講習会が相次ぐあわただしい新学期もいつの間にか過ぎ、梅雨の季節に突入しました。今年度、新しい分館長をお迎えし、また『木這子』編集委員も異動によるメンバーの入れ替えがあり、新たな体制で臨んでいます。

記憶に残る大きな出来事として、5月下旬東北地方を襲った大きな地震がありました。附属図書館本館では多くの資料、特に貴重書庫の資料が落下したり、一部建物のコンクリートがはがれたりなどの被害にみまわれました。不幸中の幸いというべきか、負傷者などは出なかったものの、資料管理上の問題、災害時の対応マニュアル整備の必要性など、様々な課題に気づかされることになりました。新たなサービスを構

築するとともに、これまである施設や資料を確実に守っていくことも図書館の大事な使命ではないかと思えます。

最後になりましたが、今年度も、編集委員一同、図書館の活動を伝え、役立つ情報を紹介するとともに、かつ利用者にとっても親しみやすい内容を目指していきます。皆様のご支援をよろしくお願いいたします。(さ)

○平成15年度広報委員会委員

委員長 清水二郎、*菅原邦男、宮本博芳、
*南館義孝、*阪脇孝子、真籠元子、
森脇ちか、*五十嵐幸子、*藤澤こず江、
白石光雄

注) *印は、木這子編集委員



東北大学附属図書館報「木這子」 第28巻第1号(通巻102号)発行日 平成15年6月30日

発行人 坂上 光明 広報委員長 清水 二郎

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内 電話 022-217-5911, FAX 022-217-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>